



わが国生命保険業の黎明期と小説

稲 葉 浩 幸

概要 わが国に近代的な生命保険事業が紹介されたのは、1867年の福沢諭吉『西洋旅案内』が最初とされる。明治維新以後、政府は富国強兵・殖産興業をスローガンに資本主義化を推進し、1881年にはわが国初の近代的な生命保険会社、明治生命が開業した。黎明期の生命保険事業は類似保険および経営基盤の脆弱な生保会社の乱設などの諸問題を抱えながらも、保険業法制定、第一生命保険相互会社の創立と順調な発展を遂げた。生命保険の浸透にともない、小説の題材としても次第に生命保険が登場するようになった。本稿では、黒岩涙香『生命保険』（1890年）と夏目漱石『吾輩は猫である』（1905年）の2編を採り上げ、その内容を生命保険の観点から検証する。

キーワード 西洋旅案内、近代的生命保険事業、明治時代、黒岩涙香、夏目漱石

原稿受理日 2006年10月13日

Abstract It was Yukichi Fukuzawa who first introduced the idea of the modern life insurance business to Japan in his 'Guide to travel around the West' in 1867. After the Meiji Restoration, the Government moved towards capitalism with the slogan of military strength and encouragement of new industry and the first modern Japanese life insurance company (Meiji Life) opened in 1881. Initially there were problems with the life insurance business, but it made progress with the enactment of the Insurance Business Law and the establishment of the Dai-ichi Mutual Life Insurance company. Life insurance then gradually came to appear in literature as a theme of novels, as it became a part of daily life. This paper looks at Ruikou Kuroiwa 'Life insurance' (1890) and Soseki Natsume 'I am a cat' (1905) from the viewpoint of life insurance.

Key words Guide to travel around the West, Modern life insurance business, Meiji era, Ruikou Kuroiwa, Soseki Natsume

1 はじめに

わが国最初の生命保険会社が誕生したのは1881年のことである。以後、今日に至るまで、生命保険は経済生活に欠かせない制度として人々に受け入れられ、2006年度の統計では世帯加入率が87.5%という高水準を保っている⁽¹⁾。保険とは、偶発的な事故による経済的損失を補填する手段である。生命保険において、それは被保険者が死亡または病気や怪我をしたことによる経済生活の不安定を解消するため、ある一定の所得を確保しようとするものである。実はこうした生命保険的な制度は明治時代以前から各地で行われていた⁽²⁾。その代表的なものの1つである頼母子講は、鎌倉時代に主に関西地方で発生し、金銭が必要な人や生活に困窮した人を助けることを目的とした、一種の共済制度である。その後、貨幣の流通にともない、関東地方へと広まると、流行していた無尽の影響を受けて、本来の救済的意味のほかに、相互金融としての側面を持つようになっていった。頼母子講や無尽の仕組みは、多数の人々が集まって組合を作り、定期的に一定の金額を払い込み、籤や入札などで順番に金銭を受け取るというものだ。その手法だけを見ると、生命保険と非常に類似した制度といえるが、そもそも保険とはリスクに対する経済的な準備であり、籤や入札などで受給者や給付時期が決まるものではない。また、保険は多数の法則や生命表によって保険事故の発生確率や年齢別・性別の保険料が公平かつ合理的に計算され、適用されており、こうした保険技術に基づかない頼母子講や無尽などはいわゆる近代的な保険としてはみなされない。

それでは、わが国に近代的な生命保険事業が紹介されたのはいつのことなのか。1867年に福沢諭吉によって書かれた『西洋旅案内』に次のような文章がある。

災難請負の事 イシュアランス

災難請負とは、商人の組合ありて、平成無事の時に人より割合の金を取り、万一其人へ災難あれば組合より大金を出して其損亡を救ふ仕法なり。其大趣意は、一人の災難を大勢に分ち、僅の金を棄て大難を通るゝ訳にて、(中略)○災難の請負に三通りあり。

第一 人の生涯を請負ふ事。此法は甚だ入組たることなり。素人同士組合を結て、若し

(1) 生命保険文化センターによる平成18年度「生命保険における全国実態調査」〈速報版〉を参照。

(2) 当時の社会経済状況や保険の歴史的な推移については、印南編(1966)、日本経営史研究所編(1981)、日本保険業史編纂委員会編(1968)などを参照した。

組合の内に病気其外災難に逢ふ者あれば、組合一統より金を出し合せてこれを救ひ、又は死後に其妻子を扶助することあり。又或は商人に元金を以て組合を立、人の生涯違者の内に年々何程かの金を取て、若し其人病気を煩ひ渡世の出来ざるよふになれば、死ぬまでの手当を年々組合より払戻し、又は約束次第にて死後の妻子を養ふこともあり。（中略）○都て災難請負の約定は、其国の政府へ貫たるものにて、万一其約定に付間違のこと起れば、政府の裁判を受るゆへ、約定するときも政府へ訴へ、夫がため運上を納ることなり。英吉利にて人の生涯を請負ふ約定の運上左の如し⁽³⁾。

以下、「第二 火災請負」「第三 海上請負」と続くが、この「第一 人の生涯を請負ふ事」というのが生命保険のことである。当時の日本は、封建的な幕藩体制を解体し、近代的な統一国家形成への移行期であった。幕府の使節に随行し、欧米諸国を巡歴した福沢諭吉は、帰国後に西洋文明の実情を詳細に記した啓蒙書を刊行した。その中で、近代的な生命保険事業がわが国に初めて紹介されたのである。明治政府は富国強兵や殖産興業をスローガンに、近代的な産業の育成や貨幣制度の確立をはかり、上からの資本主義化を推進した。政府によるこの保護育成政策により1871年に新貨条例、1872年には国立銀行条例が公布され、わが国においても近代的な金融システムが整備され始めた。こうした流れを受けて、1881年福沢諭吉の門下生である阿部泰蔵らがわが国初の近代的生命保険会社、明治生命保険会社を設立したのである。

わが国における近代的生命保険業の誕生から8年後の1889年1月、雑誌『新小説』に須藤南翠「朧月夜」の連載が始まった。この中に、実は保険が登場するのである。「東洋生命保険会社」「海運保険会社」等を舞台にした保険犯罪が描かれたこの作品は、同年11月まで連載された。筆者の知るかぎり、「朧月夜」は小説の中で初めて保険を取り扱った作品である⁽⁴⁾。以降、現在に至るまでの間に保険は探偵小説、私小説、経済小説といった幅広いジャンルを通じて、人々の生活と密着した姿を我々に現している。

本稿では、わが国における黎明期の生命保険業の歴史的背景を追うとともに、生命保険が登場する明治期の小説2編を採り上げ、その内容を検討することを目的とする。

2 黎明期の生命保険と小説

明治生命の開業以前の1879年、大蔵官僚であった若山儀一によって日東保生会社の創立

(3) 日本経営史研究所編（1981），pp. 27-28.

(4) 岡田（2004）を参照。

認可の申請が出された。米国の生命保険事業に学んだ若山は、相互組織による近代的な生命保険会社の設立を目指した。翌1880年に設立が認可されたが、契約申込者の人数が僅少であったため、開業には至らなかった。当時の日本は、1876年の国立銀行条例改正によって国立銀行券の発行が急増し、さらに殖産興業の資金や西南戦争の戦費で不換紙幣が乱発された結果、インフレーションがおこって物価が高騰していた。このため財政改革の必要性を感じた政府は、官営工場の払い下げや増税を行うとともに、不換紙幣を整理・処分した。この政策転換は激しいデフレーションを引き起こして物価が暴落した一方、企業の勃興とそれに伴う企業資金の需要増をもたらした。その結果、1880年から1883年にかけて類似保険の設立が相次いだ。類似保険の大半は賦課式保険で、掛金も生命表などに基づくものではなく、規模も少数の発起人による小規模な事業であったため、乱立による競争激化と相まってそのほとんどが消滅した。唯一、1880年に設立開業した共済五百名社はその後近代的な生命保険事業への転換に成功し、1894年、共済生命保険合資会社となった。

1881年にわが国最初の近代的生命保険会社とした開業した明治生命は、福沢諭吉門下の賛同を得て、資本金10万円の株式会社として設立された。阿部泰蔵はその回顧録の仲で「当時余等の考ふる所によれば、生命保険会社は資本金を要せざるものなれど、未だ保険の何たるかを解せざる世人は、其無資本なるを見て、却って危惧の念に駆らるることなきやを保せざるより、即ち株金拾万円を募集して資本金に充てたり」⁽⁵⁾と述べている。相互組織を目指しながらすぐに解散してしまった日東保生会社に対し、明治生命は相互扶助の理念をもとに株式会社として出発したのである。明治生命から遅れること7年、1888年には海軍出身の加唐為重らによる帝国生命保険会社が、翌89年には大阪を本社とし、わが国初の生命表「藤澤氏第二表」を採用した日本生命保険会社がそれぞれ開業し、生命保険は競争の時代へと突入した。

そうした中で、1890年、『都新聞』に黒岩涙香「生命保険」が掲載される。

●黒岩涙香「生命保険」1890年

黒岩涙香（本名・黒岩周六）。1862年土佐に生まれ、「絵入自由新聞」「都新聞」等の主筆を歴任した後、1892年に『万朝報』を創刊した。アレクサンドル・デュマ「巖窟王」、ビクトル・ユゴー「噫無常」などの翻案小説が有名だが、わが国探偵小説の先駆者であり、江戸川乱歩や吉川英治ら多くの後進作家に影響を与えた⁽⁶⁾。

「生命保険」は1890年に『都新聞』に掲載された後、同年7月に扶桑堂から刊行された

(5) 日本経営史研究所編（1981），p. 346.

(6) 伊藤編（2005）を参照。

『涙香集』に収められた短編小説である。その内容を大まかにまとめてみる。

枯田夏子は大きな屋敷の住み込み家庭教師兼子守として、2人の子供に読み書きや音楽を教えていた。父・枯田健造は夏子が17歳のときに再婚したが、夏子は継母との関係がうまく行かず、ひとり家を出たのである。ある日、夏子のもとに継母より健造死去の訃報が届く。急ぎ外郎村へと向かった夏子であったが、すでに父の死骸は棺に入れられ、その蓋は閉じられていた。継母の話によると、その夜、健造は晚餐で機嫌よく酒を飲んでいたら、急に顔色が悪くなり倒れたという。すぐさま医者診察してもらったが、夜中の1時頃に死んでしまったとのことだ。

葬式が終わり、家に戻ると、継母は夏子に遺言状の話を切り出す。健造が入っていた生命保険金壱万磅のうち、千磅を夏子へくれるというのだ。夏子は一旦断るが、継母の勧めによって受け取りを承諾する。その夜、夏子がふと目を覚ますと、部屋の入り口で誰かがこちらを見ている。それは死んだ父・健造の顔であった。翌日、昨夜の出来事を不審に思いながらも、夏子は主人の家へと戻っていった。



図1 黒岩涙香
(出典) 伊藤編 (2005), 裏表紙。

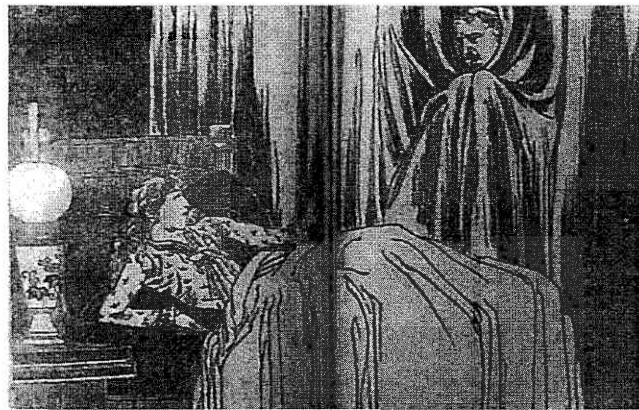


図2 「生命保険」挿絵
(出典) 伊藤編 (2005), p. 518.

数カ月後、主人が招いた画家・堀川碧水と親しくなった夏子は、碧水に父・健造の消息を問われる。碧水の叔父・堀川堀江が5カ月ほど前から行方不明になっており、その足どりを尋ねると、駐車場で偶然古い友人と会い、そのまま友人宅へ一緒に向かったらしい。その友人が枯田健造だということだ。継母にその事実を問い合わせると、健造は確かに堀川堀江を家に連れ帰ったが、晚餐になり健造が倒れると、堀江は午後10時発の電車に乗るた

め立ち去った。以後の事は関知しない、との返事があった。すぐさま外郎村へと向かった碧水から、夏子は父・健造の写真を郵送してくれと頼まれる。翌日、戻ってきた碧水は、夏子に外郎村での奇妙な話を告げた。奇妙な話とは、健造を診察した医者に見せたところ、倒れて死んだのが堀川堀江で、傍にいたのが健造だという。理由はわからないが、どうやら2人は入れ替わっていたらしい。

夏子は継母を訪ね、倫敦へと向かった。だが、継母は三日前から家を留守にしているとのこと。同居している継母の兄の部屋に案内された夏子は、そこに父・健造の姿を見つける。健造は、継母が金を持ち去ったこと、堀川堀江の死体を健造と偽り保険金を手に入れたこと、夜中に部屋を覗いたのは自分であったこと、などを告白し、その3日後に夏子に看取られて亡くなった。夏子は父の懺悔話を碧水に打ち明け、その後2人は夫婦となる。

以上が大体の粗筋であるが、継母の消息について最後にこう結んである。「さてかの継母はいかにせしぞ。これより三年を経て或る紳士の妻になり間もなくその紳士を毒殺せしとてその筋に捕われしが裁判を受けぬうちに未決檻にて病死したり。これにて見れば堀川堀江が健造の家にて不意に病を發せしも同じく継母が毒を盛たるに相違なしとて人々舌を巻しとなん」⁽⁷⁾。この説明によって、読者は継母が単に保険金詐欺だけではなく、保険金目当てに偽装殺人を計画・実行したことを仄めかされる。涙香の「生命保険」が発表されたのは明治生命開業からわずか9年後の1890年である。わが国生命保険業黎明期に書かれたこの作品の中で、生命保険は具体的にどのような形で登場するのか。

まず、継母が保険金の存在を夏子に伝える場面である。「阿父さんは私が初て来た年から生命保険会社へ壹万磅（六万円余）にその身の保険を頼んであった。それでその掛金と云うのは幸い私に少しばかりの持参金があったからそれをもって今までも滞りなく掛け続である。これがまだしもの幸いでこの通り阿父さんが死んだとなればまず壹万磅だけは保険会社から払ってくれる」⁽⁸⁾とある。ここで継母は、この生命保険の契約について、健造が自分（継母）のために加入したこと、保険金額は壹万磅であること、保険料は自分の持参金から支払っていたことを夏子に説明し、保険契約における自らの立場の重要性を主張している。また、夏子が手当の受け取りを断った後の会話では、「お前が受けぬと云ったところでそのお金が私のものになるでもなし、かえって保険会社が迷惑しその金の遣りどこに困ると云うだけの事。遠慮をせずに受取るとするがよかろう」⁽⁹⁾と、半ば強引に保険金を

(7) 伊藤編 (2005), pp. 506-507.

(8) 伊藤編 (2005), pp. 482-483.

(9) 伊藤編 (2005), p. 484.

受け取るよう勧めている。これは継母の本音がストレートに露出した文章であり、保険金詐欺が見破られないうちに保険金の支払をスムーズに終えたいという犯罪者心理が働いたものと思われる。

次に、健造が夏子に事実を告白する場面で、継母の「どうせこの人は死るのだからこれに貴方の名を負せ貴方が死んだと言触せば生命保険会社から一万磅の金が取れましょう。明日にも乞食をせねばならぬ程困窮に迫った事だから、そうして大金を手に入れてそれをもって米国へ渡ればどのような商売でも出来ますから一身代を起した上は保険会社へそれと云わずに償いが出来ましょう」⁽¹⁰⁾との言葉に、安易にその計画に乗ってしまった健造だが、「保険会社から首尾よく保険金は取ったけれど肝腎の己が病になり米国へ立つ事が出来ずこの通りグズグズしているのを女房めは見限って逃げてしまった」⁽¹¹⁾と嘆いている。替え玉を使い、生命保険会社から保険金を詐取するのに、継母の言葉は正論を述べるかの様に力強い。ただ、継母はもとより、裏切られた立場の健造でさえ、保険会社から保険金を騙し取ることについて、少しも悪びれるところがない。

父の懺悔話を碧水に打ち明けた後、夏子は保険会社に健造・堀江両者の取り違えを伝えるが、その展開には違和感が残る。「かの堀川堀江も同じ保険会社に頼み我が命へ同じく一万磅の保険を附け置かしめたりとの事にてその一万磅は碧水の名前になりいるとの事なりしかば、堀江の死ぬるも健造の死ぬるも会社にとりては同じ事なりとて、ただ差引き五ヶ月間の保険料を双方へ繰返ただけにて事済みとなり」⁽¹²⁾とあり、ここでは保険犯罪についての指摘がまったくない。本来ならば、堀江の死体を健造と偽って保険会社に報告し、保険金を受け取った時点で、替え玉による保険金詐欺が成立する。しかしながら、夏子が保険会社にした報告も、あくまで「間違い」⁽¹³⁾なのであり、犯罪という意識はない。穿った見方をすれば、父・健造を犯罪者にしないため、あるいは既に受け取っている保険金を返還しないために、事件の核心部分には触れずに保険会社へ報告したとも考えられるが、これまでの夏子の素行から判断するにそれはあり得ない。とすれば、やはり保険金詐欺という意識そのものが欠落していると考えるのが適当であろう。前述の継母、健造の場合と同様、この夏子の思考および行動から推測すると、保険契約に関するモラルがまだ確立されていない印象を受けるのである。

黒岩涙香「生命保険」はわが国初の生命保険会社、明治生命誕生から9年後に書かれた

(10) 伊藤編 (2005), p. 505.

(11) 伊藤編 (2005), p. 505.

(12) 伊藤編 (2005), p. 506.

(13) 伊藤編 (2005), p. 506.

小説である。生命保険事業の黎明期に、保険金詐欺を題材にして書かれた小説としては、サスペンスと謎解き、ロマンスが散りばめられた佳作といえるだろう。

松方デフレがおさまると、わが国の資本主義は急速な発展を遂げ、企業勃興と呼ばれる会社ブームが起った。1890年の日本経済初の恐慌を明治・帝国・日本の三大生命保険会社が無事に切り抜け、順調に業績を伸ばすと、生命保険事業が投資の対象とされた。保険業を取り締まる法規制が整備されていなかったため、1893年から1897年にかけて生命保険会社の模倣および類似保険が乱設された。その結果、競争激化による保険会社の倒産・合併が相次ぎ、保険業全体に対する信頼が揺らいだ。高まる非難を受けて、1900年に保険業法が施行され、政府の監督による免許主義下での自由競争、公示義務が定められると、生命保険の経営は健全化に向かった。

保険業法の制定により相互会社の設立が可能になると、1902年、わが国初の相互会社である第一生命保険相互会社が誕生した。第一生命創立者の矢野恒太は、『非射利主義生命保険会社の設立を望む』という冊子の中で相互主義を主張し、共済五百名社の組織変更に参画している。1904年には同じく千代田生命保険が相互会社として開業した。生命保険事業の拡大に伴い、1905年には生命保険会社協会が設立され、加盟する保険会社が模範普通保険約款の改正や宣伝等の共同的活動を行った。

同年、夏目漱石「吾輩は猫である」が『ホトトギス』に掲載される。

●夏目漱石「吾輩は猫である」1905年

夏目漱石（本名・夏目金之助）。1867年、現在の東京都新宿区に生まれる。帝国大学英文学科卒業後、教職に就く。1900年、イギリスへ国費留学し、帰国後、東京帝国大学などで教鞭をとるが、後に朝日新聞社に入社する。主な作品に「道草」「草枕」「坊っちゃん」「三四郎」などがある⁽⁴⁾。

「吾輩は猫である」は1905年1月に俳諧雑誌『ホトトギス』に掲載され好評を呼び、翌年8月まで全11回継続した漱石の処女小説である。主人公は中学の英語教師・珍野苦沙弥の家に飼われることになった猫の「吾輩」である。この「吾輩」の視点を通して、主人の苦沙弥先生をはじめ、珍野家の家族とそこに集う友人や門下生ら太平の逸民たちの姿を社会風刺を交えてシニカルに描く。

この苦沙弥先生の家には保険会社の勧誘員が訪れている。その時の様子が細君と苦沙弥先



図3 夏目漱石
(出典) 夏目 (1996), 裏表紙。

(4) 夏目 (1996) を参照。

生の姪の雪江によって語られる。以下はその抜粋である。

「その談判を陰で聞いていると、ほんとうにおもしろいのよ。なるほど保険の必要も認めないではない。必要なものだから会社も存立しているのだろう。しかし死なない以上は保険にはいる必要はないじゃないかって強情を張っているんです」「叔父さんが？」「ええ、すると会社の男が、それは死ななければむろん保険会社はいりません。しかし人間の命というものは丈夫なようでもろいもので、知らないうちに、いつ危険が迫っているかわかりませんというね、叔父さんは、大丈夫ぼくは死なないことに決心をしているって、まあ無法なことを言うんですよ」「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんかぜひ及第するつもりだったけれども、とうとう落第してしまったわ」「保険社員もそう言うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長生きができるものなら、だれも死ぬ者はごさいませんって」「保険会社のほうが至当ですわ」「至当でしょう。それがわからないの。いえけっして死なない。誓って死なないっていばるの」「妙ね」「妙ですとも、大妙ですわ。保険の掛け金を出すくらいなら銀行へ貯金するほうがはるかにましだってすまし切っているんですよ」⁽¹⁵⁾

苦沙弥先生と勧誘員とのやりとりが実に滑稽な場面である。長山（1998）の中で、この時の苦沙弥先生の保険に対する否定的な態度をとりあげ、「苦沙弥先生は、儉約して貯金しようとは思わないし、保険に入る気もないようだ」⁽¹⁶⁾と結論づけている。しかしながら、この後、外出から帰宅した苦沙弥先生と雪江との会話では、保険に対する評価が一変するのである。

「叔父さんは保険がきらいでしょう。女学生と保険とどっちがきらいなの」「保険はきらいではない。あれは必要なものだ。未来の考えのある者は、だれでもはいる。女学生は無用の長物だ」「無用の長物でもいいことよ。保険へはいいないくせに」「来月からはいるつもりだ」「きっと？」「きっとだとも」「およしなさいよ、保険なんか。それよりかそのかけ金で何か買ったほうがいいわ。ねえ、叔母さん」叔母さんはにやにや笑っている。主人はまじめになって、「お前など百も二百も生きる気だから、そんなのんきなことを言うのだが、もう少し理性が発達してみろ、保険の必要を感じるに至るのは

(15) 夏目（1996），pp. 395-396.

(16) 長山（1998），p. 168.

当然だ。ぜひ来月からはいるんだ」⁽¹⁷⁾

木村監修（1995）の中の「作家と保険」という項目で、この場面をとりあげ、漱石がロンドン留学中に訪れたロンドン・コーヒーハウスと絡めて、保険について肯定的に書かれてあると述べている⁽¹⁸⁾。

自分は死なないから保険は無用であると、無茶苦茶な論理を頑なに主張する前半部分に対し、後半部分では理性ある者は保険の必要性がわかるはずだときっぱりと断言する苦沙弥先生であるが、果たしてその真意はどちらにあるのか。細君が「人が右と言えば左、左と言えば右で、なんでも人の言うとおりにしたことがない、——そりゃ強情ですよ」⁽¹⁹⁾と嘆くと、雪江は「天邪鬼でしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせようと思ったら、うらを言うとか、こっちの思いどおりになるのよ」⁽²⁰⁾と指摘するように、保険会社の勧誘員が保険を勧めれば要らないと答え、「保険が嫌いでしょう」と言われれば「保険はきらいではない」と答える。天邪鬼な性格ゆえに、その時々で保険に対する考えも一転二転しているように見えるが、前半後半を通して、保険の効用については認めているし、保険制度が生活経済にとって必要なものであることも納得しているようである。ただ、では保険に積極的に賛同し、自ら加入する意思があるのかということと必ずしもそうではなく、天邪鬼な性格を逆手にとられ、雪江に扇動された部分が多い。長山（1998）によると、「漱石は、家族を気遣いつつも節を持して保険に入らなかった。財テクなどもしなかった。夏目家の資産運用は奥さんが大塚保治に相談して行い、株の売買や定期貯金などをしていった」⁽²¹⁾とある。苦沙弥先生は漱石自身がモデルとされるため、この雪江との会話の後も、結局保険には入らなかったのであろう。しかしながら、長山（1998）が言うように「それにしても、なぜ漱石は貯金や保険が嫌いだったのだろうか。恐らく漱石は『万一の時に』得をすることや、銀行にあずけて利息を得るとというのが、気に入らなかったのである」⁽²²⁾という意見には疑問が残る。生命保険、特にここで問題となっている死亡保険は遺族保障を目的とし、被保険者の死亡リスクを保障して、「万一の時に」その保険金受取人である遺族の経済生活を保障するものである。いわば「他人のためにする保険」の典型であり、保険金殺人などの犯罪を除いて「万一の時に」得をするという制度では決してない。漱石は保

(17) 夏目（1996），pp. 410-411.

(18) 木村監修（1995），pp. 188-189.

(19) 夏目（1996），p. 394.

(20) 夏目（1996），p. 394.

(21) 長山（1998），p. 169.

(22) 長山（1998），p. 168.

険が嫌いであったかも知れないが、苦沙弥先生同様、保険制度を理解し、保険の効用についてはおそらく認識していたものと思われる。

3 結びにかえて

わが国の近代的生命保険の歴史は福沢諭吉の『西洋旅案内』に端を発し、明治政府の資本主義化政策を受けて、明治生命保険会社の誕生、保険業法の制定、第一生命保険相互会社の開業といった著しい発展を遂げ、時には類似保険や経営基盤の脆弱な保険会社の乱設などの黎明期特有の諸問題を招いた。本稿において採り上げた明治期の小説2編のうち、黒岩涙香『生命保険』掲載時の1890年度のわが国生命保険会社数は4社、年度末の契約件数は約2万3,000件、夏目漱石『吾輩は猫である』の掲載が開始された1905年度の生命保険会社数は35社、年度末契約件数は76万7,000件となっており、15年間で会社数は約9倍、契約件数は約33倍と飛躍的に増えている²³。

こうした一般生活への生命保険の普及によって、日常生活を描いた物語・小説の中にしばしば保険が登場するようになる。諸事情により本稿では2編しか採り上げることが出来なかったが、明治・大正の黎明期には須藤南翠「朧月夜」をはじめ、廣津柳浪「河内屋」、遅塚麗水「保険娘」、川端康成「生命保険」など生命保険を題材にした小説が少なからず存在する。これらの作品における生命保険の役割とその内容について考察することを今後の課題とし、結びにかえるものとする。

参 考 文 献

- 〔1〕 伊藤秀雄編（2005）『黒岩涙香集 明治探偵冒険小説集1』筑摩書房
- 〔2〕 猪木武徳（2004）『文芸にあらわれた日本の近代—社会科学と文学のあいだ』有斐閣
- 〔3〕 印南博吉（1950）「ゲーテと保険」『損害保険研究』第12巻第2号損害保険事業研究所
- 〔4〕 印南博吉（1961）「ゲーテと保険—再考」『損害保険研究』第23巻第2号損害保険事業研究所
- 〔5〕 印南博吉編（1966）『現代日本産業発達史X XⅦ 保険』交詢社
- 〔6〕 植村達男（2005）『火災保険よもやま話』保険教育システム研究所
- 〔7〕 岡田 豊（2004）「遅塚麗水『保険娘』試論—同時代の〈生命保険〉と関連させて—」『駒澤大学文学部研究紀要』第62号駒澤大学
- 〔8〕 川端康成（1924）「生命保険」『文藝春秋』8月号文藝春秋

²³ 印南編（1968）、生保付録表Ⅰ生命保険会社事業成績一覧表 p. 14 を参照。

- [9] 木澤 清 (1980)「推理小説と生命保険」『生命保険経営』第48巻第2号生命保険経営学会
- [10] 木村栄一監修 (1995)『損害保険の軌跡』日本損害保険協会
- [11] 酒井泰弘 (2006)『リスク社会を見る目』岩波書店
- [12] 佐高 信 (1988)『当世企業案内』社会思想社
- [13] 佐高 信 (1994)『経済小説のモデルたち』社会思想社
- [14] 佐藤 進 (1987)『文学にあらわれた日本人の納税意識』東京大学出版会
- [15] 佐波宣平 (1955)『保険危言』通信教育振興会
- [16] 田尾雅夫 (1996)『企業小説に学ぶ組織論入門』有斐閣
- [17] 遅塚麗水 (1896)「保険娘」『文藝倶楽部』第2巻第4編博文館
- [18] 戸倉一樹 (1972)「生命保険をめぐる人間模様」『週刊東洋経済臨時増刊生命保険号』No. 3673 (6月27日号) 東洋経済新報社
- [19] 長山靖生 (1998)『「吾輩は猫である」の謎』文藝春秋
- [20] 夏目漱石 (1996)『吾輩は猫である』(改版82版) 角川書店
- [21] 夏目漱石 (2003)『道草』(93刷) 新潮社
- [22] 日本経営史研究所編 (1981)『近代生命保険生成史料』明治生命保険
- [23] 日本保険業史編纂委員会編 (1968)『日本保険業史・総説編』保険研究所
- [24] 古川智映子 (1988)『小説 土佐堀川一女性実業家・広岡浅子の生涯』潮出版社
- [25] 松阪俊夫 (1973)「『生命保険』『赤い喪服』他一川端康成“掌の小説”ノート」『国語研究』第23輯山形大学教育学部国語国文学研究会
- [26] 宮脇 泰 (1988)「わが国保険業界紙の嚆矢『保険新報』第壹号にみる掲載記事について」『生命保険協会会報』平成元年8月号生命保険協会
- [27] 森 直造 (2004)「永井龍男と火災保険証券」『インシュアランス』損保版12月号第1集第4113号保険研究所